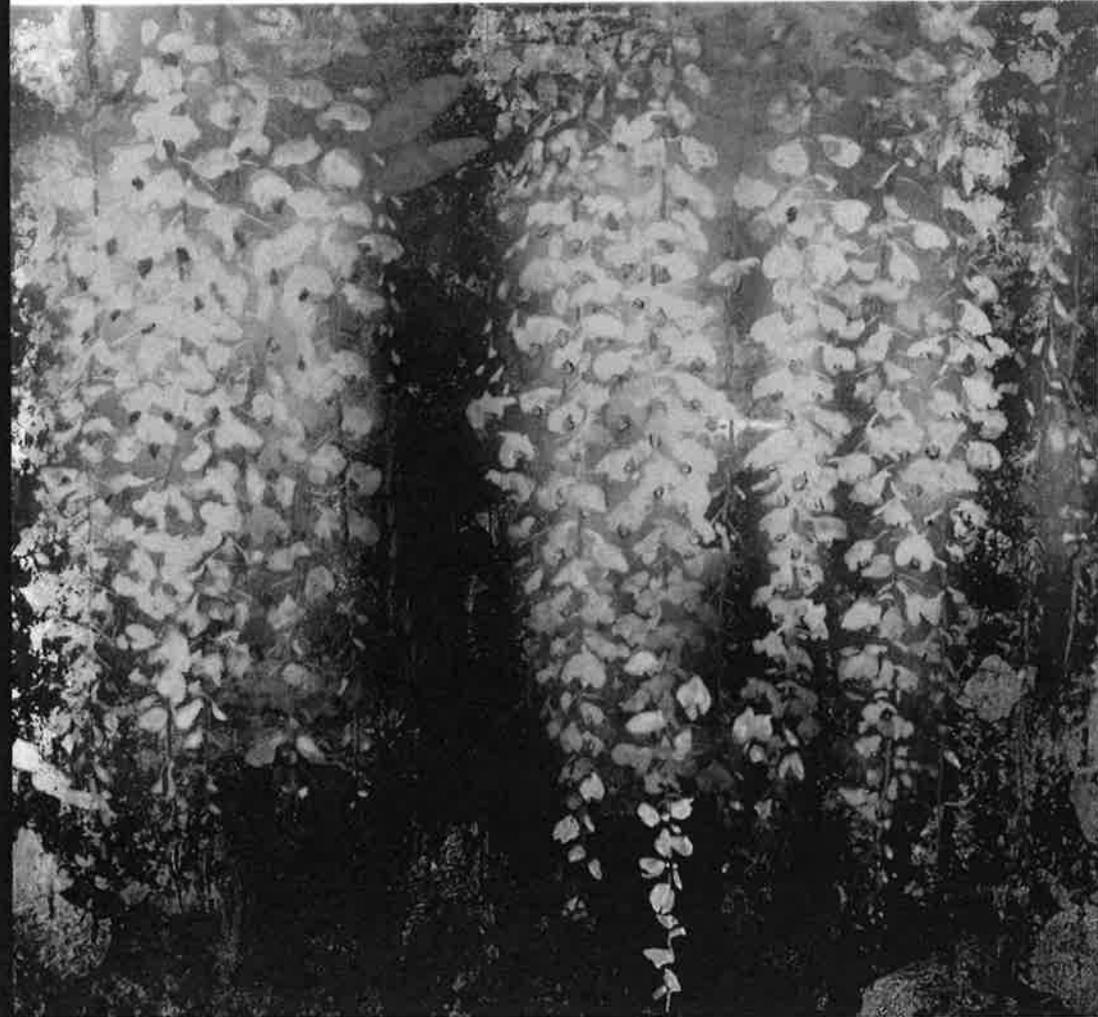


文藝春秋

正十二年一月三十日第三種郵便物認可
 成三十年五月一日発行(毎月一回)日発行
 九十六巻五号四月十日発売

総力特集 安倍村度政治との訣別 95th
 自殺・財務省職員父親の手記/「官邸官僚」の研究 文藝春秋

大特集 病気にならないからだ/元SMAP3人座談会 五月号



飾らない、急がない、
 景色を味わう。

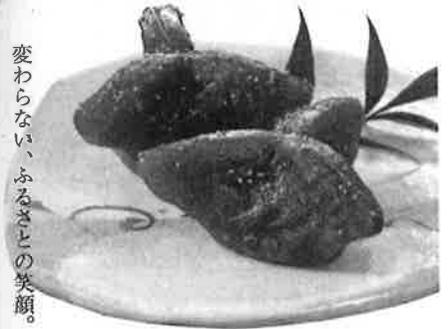
福島県三春町

家伝

やぶし



変わらない、ふるさとの笑顔。
 変わらない、ふるさとの味わい。
 みちのくのぬくもりを一緒に添えて…
 お土産は、かんのや「家伝ゆべし」。



まごころに おいしさ映かせて
かんのや

本社/福島県郡山市西田町大田字宮木田3番地 TEL.0247-82-5676

かんのやオンラインショップ
 家伝ゆべしのご注文はこちらまで

かんのや



全国発送承ります。

インターネットで www.yubeshi.co.jp
 (24時間受付)

お電話で [0120-040-141](tel:0120-040-141)
 (受付時間9:00-17:00)

7701-05

雑



4910077010580
 00815

将軍の世紀

やまうち まさゆき
歴史学者・
東京大学名誉教授

第五回 公儀と大御所

息子に將軍職を譲った家康は、秀吉が失敗した「二元的主制」を完成させる



(上) 二代将軍となった徳川秀忠
(下) 大御所。家康が居住した駿府城跡



のを五変とするとところにあった。

新井白石は、江戸中期の六代家宣と七代家継の代に政務にも当たった儒学者である。設問は、「白石の時代区分の特色を、そのなかに重複した部分が現われることに注目して、4行以上6行以内で述べよ」というのだ。出題者は、政治権力が天皇から外戚の藤原氏、そして上皇から武家の代に九変して移り、武家の代も五変して徳川の治世に移った事実を踏まえ、白石が歴史の流れを公家政治から武家政治への転換として理解したと答えることを期待したはずだ。九変とは古代から続く天皇の国家が次第に衰退し、ついに実質的に消滅するまでの九段階を指し、五変とは新しい武家国家形成の五段階を意味する。鎌倉幕府成立から南北朝に至る公武の「並立」を経、南北朝滅亡と室町幕府の出現によって、武家権力の一元政治が定着する筋道に新井白石が触れた事実を受験生が着目し、白石が徳川幕府の政治的正統性を史実と論理の両面で証明したと書けば高い点をもたらえたのだろう。さて、この入試問題には、徳川家康による幕府開設の意味を考える上で重要な手掛かりが二つ含まれている。その第一は、政治権力が天皇から江戸幕府に移った意味を白石が時代区分によって正当化したことだ。「尊氏よ

一、東大入試日本史の徳川幕府論

東京大学の一九八四年度入試の日本史にかなり凝った問題が出された。まず問題文を覗いてみよう。

新井白石は、「読史余論」を「本朝天下の大勢、九変して武家の代となり、武家の代また五変して当代におよぶ総論の事」と書き始め、「九変五変論」とよばれる独自の時代区分論を展開した。その要旨は、藤原良房の摂政就任による「外戚専権の始」を一変とした後、藤原基経の関白就任を二変、冷泉天皇の世から「外戚、権を専に」したのを三変、後三条・白河両天皇の親政を四変、堀河天皇の世からの院政を五変、後鳥羽天皇の世から「鎌倉殿、天下兵馬の権を分ちつかさど」ったのを六変、後堀河天皇の世からの北条氏の執権政治を七変、後醍醐天皇の建武中興を八変、足利尊氏が光明天皇を立てて「天下ながく武家の代」となったのを九変とし、また「武家の代」については鎌倉幕府の成立を一変、北条氏の執権政治を二変、室町幕府の開創を三変、織田・豊臣政権の成立を四変、「そののち終当代の世」となった

り下は、朝家はただ虚器を擁せられしままにて、天下は全く武家の代とはなりたるなり。朝廷が実体を失ったと語る白石は、朝廷政治から武家政治への変動を儒教でいう易姓革命として把握したといってもよい。

第二は、豊臣の滅亡と徳川の興隆を歴史の必然性として正当化した点である。秀吉の遺児で自分の孫婿だった秀頼を死に追いやった大坂夏の陣は、天下人の家康にも複雑な陰翳を心に残したはずである。しかし白石は、秀吉その人が信長の子や孫が「愚闇」か「幼」なるを欺き国を奪った報いとして二代で終わった点を強調する。白石は「その遺風の世の害をなせる事のみある」として、大閥検地や刑罰の過酷さ、武家官位の過剰な上昇、財を浪費する贅沢ぶりを批判し、家康の権力掌握を歴史の必然的な流れに位置づけた。

後醍醐天皇の新政が挫折した後、南朝が滅びて足利、織田、豊臣による「武家の代」が到来しても、統治が不安定だったのは、治者が徳ではなく力で支配する「伯者」(覇者)だったからだ。天下に仁政を行う本当の「王者」が出なかったのである。家康こそ泰平の世を持続的にもたらす王者であった。それ故に天下の人びとが自ずからつき従った、と白石は説いた。まさに「服従されない者には権力なし」というアラブの諺は、家康にこ